

14 年ぶりの里帰り

里見 文

私は、2004 年から 2006 年まで JICA 青年海外協力隊の日本語教師隊員として、国立エルサルバドル大学（UES）で活動していました。現在は国際交流基金サンパウロ日本文化センターに日本語専門家として派遣されていて、ブラジル国内の高等教育機関支援を主なミッションとして働いています（当センターの日本語教育事業については、こちらをご参照ください：<https://www.ipf.go.jp/i/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/nanbei/brazil/2019/report01.html>）。

2019 年エルサルバドルで実施された「第 10 回中米・カリブセミナー」には、当センターで南米広域の日本語教育を担当している専門家が出講しましたが、2020 年は諸々の事情が重なり、私が出張することになりました。私にとって 14 年ぶりのエルサルバドルです。昨年同僚の専門家が出張する前に、エルサルバドルの話をして懐かしく思っていたのですが、まさか今年は私が出張することになるとは思いませんでした。



フリホーレス・コン・ケソのププサ

エルサルバドルを訪れるのは 14 年ぶりでしたので、記憶もあいまいで、空港も、空港からセミナー会場である大学（UCA）までの道のりも、街並みも特に何の感慨もなく、「こんな感じだったっけな？」と思いながら移動していました。到着当日の夜、一緒に出張に来ている人たちとご飯を食べに行くことになり、向かったのはもちろんププサ屋さんでした。そこでフリホーレ

ス・コン・ケソ（豆のペーストとチーズ）のププサを一口食べたとき、一気に 14 年前の記憶が押し寄せてきました。2 年間、ほぼ毎日食べていたフリホーレスの味です。早朝クラスの後、学食で朝食として食べたり、フレッシュチーズと一緒にパンに挟んでおやつみたいに食べたり、もちろんププサの具として食べたり。フリホーレス・コン・ケソのププサを食べた時に初めて、私はもう一度エルサルバドルに戻って、「私はこの国を知っている！」と実感しました。一瞬で 14 年前に引き戻されたように感じました。一緒にいた方は「（ププサは）長野のサービスエリアとかにありそうだね」とおっしゃっていましたが、私にとってのププサは、懐かしいエルサルバドルのソウル・フードです。

出張、ということで朝から晩まで用務があったので、エルサルバドルにいる友だちには誰にも何も言わずにエルサルバドルの空港に着きました。そこで、Facebookのチェックインをしたら、ホームステイ先の家族や、友だち、元学生からたくさんのメッセージが届きました。その日の夜に、14年前にホームステイをしていた家族から電話がかかってきました。「一瞬でもいいから、会いたい！」



ママと家族。当時は新婚だった息子夫婦とまだ生まれていなかった子どもたちと

と、その日の私の用務が終わった 22 時すぎに道に迷いながらもホテルまで来てくれました。私は、1 年半以上同じ家にホームステイをさせてもらっていました。毎週日曜日のお昼は、別の家で暮らしているママの子供たちとその子供たちが集まって、ママの手料理で昼食会をしていました。ママも家族も本当に愛情深い人たちで、どんなときも私を家族の一員として受け入れてくれました。ママ・サルバドレーニャとは、毎日いろいろな話をされていて、たくさん助けてもらって、本当に私にとってのもう一人のママでしたし、今でもそう思っています。この日は本当に短い時間しか話せなかったのですが、「あなたの家族がいつもあなたを想っていて、いつもここであなたを待っているのを忘れないで。またすぐ帰ってきてね。」と言ってもらい、それが本当に心からの言葉だというのが分かって、胸がいっぱいになりました。



14 年ぶりに再会した友だち

そして、ママと家族との再会と同じくらい嬉しかったのは、14 年前に UES で日本語を勉強していた大学生で、とても仲が良かった友だちが、日西英の通訳者兼日本語教師として活躍していることを知ったことです。当時から日本語の勉強が大好きで、いつも日本語でいろいろな話をしていました。悩みもたくさん聞いてもらったし、くだらないことで一緒に笑ったり、たくさん

の時間を一緒に過ごしました。その彼が、多くの生徒に慕われる先生として立派になってそのセミナーにいる姿を見て、とてもとても温かい気持ちになりました。教育はすぐ目に見える結果が明らかになる分野ではないと思います。何をもって「教育の成果／成功」というのか、私にはまだよく分かりませんが、「日本語を勉強すること」をお手伝いすることで、その人の人生に何かの種をまけたらいいなと思います。そして、それがどんな花でもいつか咲くまで（あるいは咲かなくても）、たくさんの人が愛情を持って見守り育てることが大切だと思います。

私はこれまでいろいろな国で働いてきましたが、日本以外に「故郷」だと思える国はエルサルバドルだけです。どうしてなのか、エルサルバドルの何がそんなに好きなのかと聞かれても返答に困るのですが、とにかくこの国の人たちが好きです。この国に住んだのはたったの2年間ですが、大切な家族がいて、大好きな友だちがいる私の故郷です。今度は14年という長い時間を空けずに、仕事ではなく、ゆっくりと里帰りができたらいいなと思います。

里見 文（さとみ あや）氏

2004年から2006年までJICA 青年海外協力隊日本語教師隊員として国立エルサルバドル大学で活動。帰国後大学院に進学し、国内外の高等教育機関に勤務。2018年12月より、独立行政法人国際交流基金サンパウロ日本文化センターに日本語専門家として派遣されている。